

明海大学 不動産学部

不動産の不思議

学生たちの視点と発見

第213回

【学生の目】

都心部から少し離れた住宅地にひよっこりと佇む、温かみのある戸建て住宅が目にとまった。南側の2階部分に10寸勾配程度の

シンプルな木造住宅

の屋根があるベランダと1階部分に手すりのついたデッキがあり、北側に3寸勾配程度の屋根をもつ2階建ての住宅だ(写真)。

都会にあるログハウスの温かさ

写真の住宅は色使いも特徴的だ。妻側の破風や手すりは白に、壁面は赤に塗り分けている。太陽が当たると部分の白は一段と白く、深い庇(ひさし)やベランダが影を落とす壁面は落ち着いた赤に。コントラストの強さが光を強く感じさせ、明るい街の雰囲気づくりに貢献している。



住宅地で目にとまったログハウス。暮らしを満喫している様子が伝わってくる

なことや丸太の確保が次第に難しくなっていることも理由である。

ログハウスは建築基準法では丸太組工法の適用を受ける。主として耐震性の問題から、02年までは1階部分しか丸太を組むことができなかったため、2階部分は屋根裏をロフトとして利用していた。この名残を写真の住宅の南側部分に見ることができ、当時は延べ床面積300㎡、高さ8・5層以下の制約もあった。

この住宅には2つの魅力がある。1つは建物が後退しているので正面にゆったりとしたスペースができ、駐車場の他にベンチを置いたり園芸を楽しむことができる余裕がある。

02年以降は2階部分を丸太組みすることも可能となり、延べ床面積300㎡、高さ13層まで認められるが、2階部分を居室とする場合は、在来工法である軸組み構法と組み合わせることも多い。写真の住宅の北側部分がこの造りだ。少しでも快適なロフトとするために、出窓や緩勾配の屋根をつけて高さや明るさを確保していた名残を感じ

る造りで、ログハウスに独特な形状が印象的だ。

無垢の丸太で壁面をつくるログハウスには丸ごと天然の贅沢がある。荒々しい自然に立ち向かう力強さから山小屋などに用いられる半面、耐震性に課題があり、日本での普及は限定的である。有り余る天然を表現し利用する力量を評価したい。

など、気になる点もある。だが、庭に咲いた花や庭いじりの際の休憩に使おうと思われるベンチも含め、住んでいる人がこの住宅で暮らしを満喫している様子がうかがえて温かい。

【教員のコメント】

無垢の丸太で壁面をつくるログハウスには丸ごと天然の贅沢がある。荒々しい自然に立ち向かう力強さから山小屋などに用いられる半面、耐震性に課題があり、日本での普及は限定的である。有り余る天然を表現し利用する力量を評価したい。



武田 亜輝士
不動産学部3年